

審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2998 号	氏名	下村 豪
審 査 担 当 者	主 査 小曾根 基裕 (印) 副主査 西 昭徳 (印) 副主査 田中 永一郎 (印)		
主論文題目： Association between problematic behaviors and individual/environmental factors in difficult children (育てにくさを示す児童における問題行動と個人・環境因子の関連についての研究)			

審査結果の要旨（意見）

本研究は、子育て支援を目的に、育てにくい児童の問題行動と児童自身およびその養育環境との関連性を明確化するために、本邦で行われた5歳時検診 8691 例という膨大なデータを解析したものである。少子化とともに、家族機能が失われ子育てが困難であると言われる現在において、社会的に価値の高いデータと言える。研究結果としては、個人因子（出生順、出生時異常）はもとより、環境因子（母の現在の喫煙、子育て相談の相手がいない、長時間のテレビ視聴）が問題行動のリスクとの関連性が示されたことから、幼児自身の問題以上に、環境、特に母親自身の置かれた環境の改善が重要であることが示された。その結果、子育て相談を始め、母親自身のケアを行うことが幼児の問題行動の軽減に重要であることが明らかとなった。本研究は2020年のBrain & Development（日本小児神経学会の英文雑誌；インパクトファクター1.504）に掲載されており、学位論文として十分ふさわしい研究である。

論文要旨

育てにくさを示す子どもは、落ち着きのなさや暴力的、母親から離れたがらないといった規定から外れた行動をとり、子育てする親を疲れさせる。本研究は子どもの問題行動に影響する要因を特定し、子育てをサポートすることを目的とする。

子どもたちの問題行動と個人・環境因子は5歳児健診 8691 例から収集した。問題行動は不安行動、発達行動、習癖行動の3つのカテゴリーに分類した。個人因子は性別、両親の年齢、出生順、出生体重、出生時の異常、環境因子は妊娠中/現在における母の喫煙、パートナーの育児協力、子育ての相談相手、テレビ視聴時間とし、ロジスティック回帰分析でこれらの行動と悪化因子についての関連性を特定した。

個人因子（出生順、出生時異常）、環境因子（母の現在の喫煙、子育て相談の相手がいない、長時間のテレビ視聴）は問題行動でのリスクとなった。

育てにくい子どもの行動は個人因子のみならず、環境因子の影響も受け、子育ての負担を軽減するために医療者はこれらの悪化因子に注意する必要がある。